



## 地理の写真館

### EU議会 (ストラスブール)

ヨーロッパを地誌学習で扱う場合、EUはその中核をなす。しかし、その主要機関がおかれている都市については案外教材が少ない。それは、EUの諸機関のある町が比較的小規模な都市から選ばれたことが大きな理由であろう。しかも、本部はブリュッセル、議会はストラスブール、というように分散しておかれた。EUが拡大した翌年の2005年8月上旬に、ある研究会の巡検でEUの諸機関がおかれるそれらの各都市を訪問する機会を得た。ここではEU議会があるストラスブールについて報告する。

円形のガラス張りの建物は、EU議会の新議場である。ストラスブールに限らず、EU関連施設を持つブリュッセルやルクセンブルクなどでは、EUが15か国(1995年)から25か国(2004年)に拡大したために、このような新施設の建設が目立つ。旧市街からみれば郊外にあり、新しい観光資源となりつつある(写真①)。

ストラスブールでは、1988年に世界文化遺産にも登録された伝統的町並みと、それをめぐる運河をみるることができる。旧市街の多くは中世からの木造家屋で、

写真でも確認できるように屋根の傾斜が急であるのは、降水量が多いためといわれる(写真④)。

運河にかかる橋をトラムと車が通る。都市活性化のために、自動車の都心乗り入れは禁止され、トラムが復活された。運河が旧市街を環状にとりまくストラスブールは、重要な河港であった(写真③)。

郊外の住宅地から旧市街地の中心に行くには、トラムを利用するしかない。観光客や買い物客でにぎわう広場付近を、軽快にトラムが走っている。車両は歴史的建物とも調和したデザインであり、環境にやさしく、建設費が地下鉄よりも安いので、近年注目されている(写真②)。

今日のヨーロッパの地誌学習を考える上で、EU抜きでは考えることはできない。今年、加盟国27か国の時代を迎えて、いずれも旧市街を中心とした都市全体の再開発が行われようとしている。変化するEUの実態をどう生徒につたえていくべきか、これは地誌学習の大きな課題でもある。

(京都明德高等学校 矢野司郎)

#### 写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。海外巡検などで撮影された地理的写真を、資料編集部「地理・地図資料」係までお送りください。